Fergus McCaffrey

ウルス・フィッシャー
間違い探し - Spot the Difference

ファーガス・マカフリー東京
2026 年 4月 11 日– 7 月 4 日
11 – 19 時。 日曜, 月曜, 祝日 休廊
オープニングレセプション 4 月 11 日 17 – 19 時
＊展覧会初日は 17 時までご入場いただけません。

ウルス・フィッシャーは、ユーモアやあり得なさを想起させる要素を用いながら、それらを無邪気さという装いの中に包み込みながら、絵画や彫刻をめぐる本質的かつ哲学的な問いを喚起します。ファーガス・マカフリー東京における初個展のタイトルは、「間違い探し（Spot the Difference）」の遊びに由来しています。本展では、時代を超える実存的なテーマが蝋によってかたちづくられ、やがて溶解していく一方で、遊び心に満ちた発想はブロンズに鋳造され、恒久的なものとして提示されます。

挑発的でありながらも陽気な精神は、この 30 年にわたり、ハイカルチャーとキッチュ、永続性と一時性、精神と身体、真実と欺瞞といった二項対立を探求するフィッシャーの制作を推し進めてきました。その実践は常に既存の期待を裏切り、現代美術の分類を超越し、専門家から一般の観者に至るまで、幅広く熱心な支持を集めています。

Urs Fischer
Standing Julian, 2015
Paraffin wax, microcrystalline wax, encaustic pigment, oil paint, steel, wicks.
100 x 41 3/4 x 27 5/8 in. 254 x 106.1 x 70 cm
AP 2 of Edition of 2 & 2 AP
© Urs Fischer. Courtesy of the artist and The Whitney Museum of American Art, New York. Installation view: “Human Interest: Portraits from the Whitney's Collection,” Whitney Museum of American Art, New York: 4/27/16 – 2/12/17
Photographer: Bill Orcutt

「間違い探し」展の構想は、ギャラリーの建築的構造を中心に組み立てられています。隅々まで仕上げられたメインギャラリーが、未完成の地下空間の直上に位置するという構成が、作家に意識と無意識の心理へと分け入る契機を与えました。

1 階スペース:
作家自身をかたどった、本人よりも大きな同一の彫刻が一対となって、それぞれ同一の二つの空間に設置されます。彼らはまるで思いつき開けられたような穴を介して、視線を交わしています。《Mirror》と名付けられたこれらの彫刻は、フィッシャーの代表的な「キャンドル・ポートレート」の一例であり、展覧会初日に点火されます。その後、それぞれが独立して溶解し、垂れ下がり、崩れ落ちながら、蝋滴りが 3 か月の会期のあいだ床面に徐々に蓄積していきます。会期終了時には、これらキャンドルの残余は清掃によって取り除かれ、死と再生の反復的な循環の一環として、あらためて完全な姿で鋳造されます。

《Mirror》というタイトルは一義的な自己反省を想起させますが、フィッシャーによる変容しゆくセルフ・ポートレイトと、即興的に穿たれた壁の開口部は、多様な解釈の可能性を示唆します。この開口部は、密やかな対話のための抜け道、それとも逃走の手段なのでしょうか。それぞれの彫刻の背後にはくり抜かれた壁の断片が置かれています。それらは再びはめ戻され、そこで起こった秘密の出来事の痕跡は消されることになるのでしょうか。この穴は一体いかにして生じたのか。そこではどのような対話が交わされているのか。問いは尽きることがありません。

Urs Fischer
Standing Julian, 2015
Paraffin wax, microcrystalline wax, encaustic pigment, oil paint, steel, wicks.
100 x 41 3/4 x 27 5/8 in. 254 x 106.1 x 70 cm
AP 2 of Edition of 2 & 2 AP

© Urs Fischer. Courtesy of the artist and The Whitney Museum of American Art, New York. Installation view: "Human Interest: Portraits from the Whitney's Collection," Whitney Museum of American Art, New York: 4/27/16 – 2/12/17
Photographer: Bill Orcutt

地下スペース：
上階における「穴」と「修復」のモチーフを引き継ぎ、フィッシャーはサブ・ベースメント全体の床および壁面で、ロールシャッハ的な没入的インスタレーションを展開しています。コンクリートに残った穴や補修の跡と、それらの転写との境界線を、壁紙を使用して曖昧にするのです。この空間は、混乱を誘う二重化された自己反射的な「鏡の間」へと変容し、鑑賞者に対して、壁面・床・天井に配置された彩色ブロンズ彫刻と遊戯的なドローイングのあいだで「間違い探し」を行うことを促します。

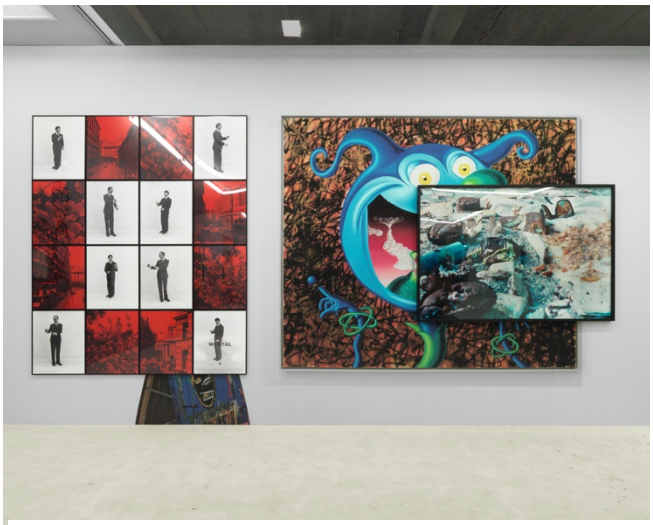
Urs Fischer
The Intelligence of Flowers, 2005,
Cuts in wall with relocated cutouts. Dimensions variable

© Urs Fischer. Courtesy of the artist and Galerie Eva Presenhuber, Zurich.
Installation view: "Day for Night," Whitney Biennial, Whitney Museum of American Art, New York: 3/2/06–5/28/06.

これらの彫刻は、とても小さなものから中型のものまで多様なサイズで展開され、《Attitude》《A Man & A Rose》《Carnivores》《Drama》といった謎めいたタイトルが付されています。それらは物理的な謎を提示する存在であると同時に、作家の無意識の一端を示唆し、フィッシャーの思考がいかにして創造的な混沌に秩序をもたらしているのかを垣間見せるものでもあります。

セルフ・ポートレイトの実践は「間違い探し（Spot the Difference）」展の中心に位置しており、フィッシャーは自身の顔や身体へと繰り返し立ち返ることで、アルブレヒト・デューラー、フィンセント・ファン・ゴッホ、アリギエロ・ボエッティといった多様な作家に見られる人物表現の原型的な言語とその歴史を喚起し、探究しています。彼らは、自らのイメージを作家の精神世界に続く回路として提示してきました。コンセプチュアル・アート、ポップ、ミニマリズム、アル

テ・ポーヴェラといった複数の文脈が交差する領域において制作を行うフィッシャーは、ユーモアと深い洞察を併せ持ちながら、セレブリティの生成をめぐるメカニズム ―すなわちイコン化、重厚さ、そして欺瞞― へとさらに踏み込んでいきます。



Urs Fischer
Abstract Slavery, 2008
Wallpaper prints of photographic reproductions of interior spaces (content, scale, and lighting determined on a site-specific basis).
Dimensions variable

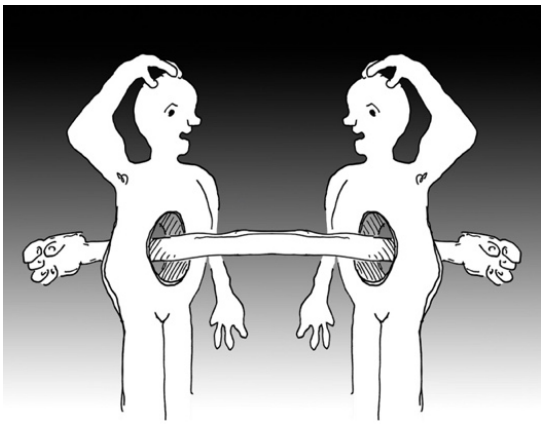
© Urs Fischer. Courtesy the artist and Tony Shafrazi Gallery, New York. Private collection
Installation view: "Who's Afraid of Jasper Johns?" Tony Shafrazi Gallery, New York: 5/19/08–7/18/08
Photographer: Stefan Altenburger

《Mirror》において自己を二重化することで、フィッシャーは、自身の内にある未だ明かされない複数の側面のあいだに、深淵な対峙関係を生み出し、鑑賞者のさらなる関心と好奇心を引き寄せます。ジークムント・フロイトは、1920 年の著作『快感原則の彼岸』において、自己をイド・自我・超自我のあいだにおける絶え間ない葛藤として捉え、とりわけ自我がイドの原初的欲動と、超自我による社会的規範とのあいだを媒介し調整するものとして位置づけました。しかしながら、フィッシャーは、自身の姿が自己焼却と再生を反復するプロセスを通じて、フロイトの枠組みを越え、より深層へと到達する契機を提示しているといえるでしょう。

日本で初めて公開されるフィッシャーの「キャンドル・ポートレート」は、とりわけ、瞑想を通じてイド／自我／超自我の対立を乗り越え、環境から分離した自己という幻想を解体しようとする禅仏教の実践の観点から捉えることができます。禅はまた、「公案」においてユーモアや不条理を用い、自己実現の達成を妨げるあらゆる概念や構造から修行者を解き放ちます。そして、存在の本質が哲学的・理論的な把握にあるのではなく、ある在り方の体得にこそあることを理解させようとします。

理論や演出性を分析的に剥ぎ取りながら、フィッシャーの芸術は、変容、崩壊、そして再生のドラマを通じて、私たちに深い示唆をもたらします。

作家について



© Urs Fischer

ウルス・フィッシャーは 1973 年にチューリッヒに生まれ、同地の Schule für Gestaltung にて写真を学んだ。これまで国際的に広く展覧会を開催しており、その作品は世界各地の主要な公私コレクションに収蔵されている。

主な個展は、「Skinny Sunrise」（Globus Public Art Project with Fondation Beyeler、2025 年）、「Urs Fischer」（テルアビブ美術館、イスラエル、2022 年）、「The Lyrical and the Prosaic」（Aïshti Foundation、ベイルート、2019 年）、「ERROR」（The Brant Foundation Arty Study Center、グリニッジ、コネチカット州、2019 年）、「PLAY」（振付家 Madeline Hollander と共に、Jeffrey Deitch、ロサンゼルス、2019 年）、「Big Clay #4 and 2 Tuscan Men」（Piazza della Signoria、フィレンツェ、2017 年）、「The Public & the Private」（Legion of Honor Museum、サンフランシスコ、2017 年）、「Mon cher...」（Fondation Vincent Van Gogh、アルル、2017 年）、「Small Axe」（Garage Museum of Contemporary Art、モスクワ、2016 年）、「Urs Fischer」（ロサンゼルス現代美術館、2013 年）、「Madame Fisscher」（Palazzo Grassi、ヴェネツィア、2012 年）、「Skinny Sunrise」（Kunsthalle Wien、ウィーン、2012 年）、「Oscar the Grouch」（The Brant Foundation Art Study Center、グリニッジ、コネチカット州、2010 年）、「Marguerite de Ponty」（ニューミュージアム、ニューヨーク、2009 年）、Cockatoo Island（Kaldor Art Projects and the Sydney Harbour Federation Trust、シドニー、2007 年）、「Paris 1919」（Museum Boijmans Van Beuningen、ロッテルダム、2006 年）、「Jet Set Lady」（Fondazione Nicola Trussardi、ミラノ、2005 年）、「Kir Royal」（Kunsthaus Zürich、2004 年）、「Not My House Not My Fire」（Espace 315, Centre Pompidou、パリ、2004 年）など。

また、主なグループ展は、ヴェネツィア・ビエンナーレ（2003 年、2007 年、2011 年）、「Burning Down the House」（光州ビエンナーレ、2014 年）、「Sequence 1: Painting and Sculpture in the François Pinault Collection」（Palazzo Grassi、ヴェネツィア、2007 年）ほか多数。

現在はロサンゼルスを拠点に活動している。

プレスに関するお問い合わせ
Tel: +81 (0)3 6447 2660
Email: tokyo@fergusmccaffrey.com